

九州産業考古学会報

第21号 2014年11月3日発行 発行元：九州産業考古学会

産業考古学の魅力

尾崎徹也（事務局 企画担当）



産業考古学は皆さんご存知の通り、明治維新から昭和20年の第2次大戦終結までの産業に寄与した遺跡や遺物、現在でも現役で稼働している施設や設備建物を対象に研究する学問です。産業考古学の研究者は、その遺跡が近代技術史の進展にいかに関与したか、また社会的にどのような影響を及ぼしたかなどを中心に理論だった研究を行っています。

私は学者ではなく本業が産業人なので、産業考古学を研究する時ちょっと違ったところに魅力を感じています。ここに2、3 筑豊御三家によるエピソードをご紹介します。

【麻生太吉による嘉穂銀行の設立】 麻生太吉は石炭の儲けを筑豊の人たちに役立てねばとの思いから、地元の繁栄のために銀行を設立した。太吉はこの銀行が、自分個人のためでなく、筑豊全体の発展と隆盛を希っての設立であることを強調し、そのためこの銀行からは個人的な資金の援助は受けないという潔癖さを示した。

【貝島私学と呼ばれた私立小学校の設立】 もうひとりの御三家である貝島太助は、私立大之浦小学校を設立し、生徒に学用品を買い与えたばかりでなく、出席すれば一日五銭（五銭の金で、当時は米が一升買えた）を与え出席を促した。明治初頭、多くの親は子供を稼業の労働力としか見ていなかったから、学校へ通わず親は少なかった。この小学校は、大之浦小学校へと発展し、明治の末頃には、千人を超える小学校になった。その後、私立満之浦小学校、岩屋、菅牟田、大辻にも次々に小学校を開設した。

現代の企業にはCSRと言う企業の社会的責任が求められています。企業が利益を追求するだけでなく、企業の活動が社会に与える影響に責任をもち、あらゆる利害関係者（従業員、投資家、消費者及び社会全体）に責任を持つということです。

昨今問題となっているブラック企業とは何でしょうか。究極の表現をすれば、働く者を人として遇するのではなく、家畜として扱うことだろうと思います。利益の最大化こそ企業の絶対最高価値であるとの錯覚が、根底に横たわっているのです。

明治の経営者の志は、まさに現代社会における企業のSCRそのものだと思います。産業考古学を学んでいると、産業人として「目から鱗」の出会いがあります。

【報告】

平成 26 年度総会

砂場一明（事務局長）

6月29日（日）、平成26年度総会を大牟田市で開催した。かつて日本一の出炭量を誇った三池炭鉱に関わる一連の施設が今も良好な状態で残されていることから、大牟田市は隣接する熊本県荒尾市と共に「明治日本の産業革命遺産 九州・山口と関連地域」として、2015年の世界文化遺産登録を目指しており、その機運の高まりが街中のあちこちを感じられる。総会に先立って行われた三川坑坑口特別見学会の後、会員有志は総会会場に移動した。会場の大牟田市石炭産業科学館は、日本の近代化を支えた石炭産業と三池炭鉱の歴史を未来に語り伝えるため、炭鉱閉山間際に開設された博物館である。

総会には会員16名が出席し、大石道義会長による開会挨拶のあと議事次第に沿って前年度の活動及び会計報告がなされた。役員人事については、規約第7条〈任期〉に基づき全員留任ということで承認された。

今年度の主な事業としては、会報の発行・後援催事などの定例行事と懸案だった対馬見学会（9月）を実施する。秋には産業考古学会全国大会（岡山市、11月）と赤煉瓦ネットワーク全国大会（群馬県富岡市、11月）が開催されるので、それと関連した活動が考えられる。その他、荒廃が進む三川坑跡の保存・活用について審議されたが、当局への要望については、すでに今春も関連文書を提出していることもあり、その状況を見守ることになった。

引き続き研究発表会が行われ、永吉守氏「記憶から産業遺産への翻訳～産業考古学

への人類学的接近法～」、國盛麻衣佳氏「炭鉱に特有に創出された産炭地労働者による芸術運動と創造活動～三井三池と筑豊を通して～」が発表された。地元報告として藤木雄二氏「三池炭鉱三川坑保存の現状と今後」が映像を交えて紹介された。

昼食後には短時間ではあったが館内の展示を見学し、また収蔵庫の廻船問屋・山本家文書を閲覧させてもらい、それから午後の見学会に移った。

このたびの総会並びに見学会を実施するにあたっては、「大牟田・荒尾炭鉱のまちファンクラブ」の方々に多大なる御協力を賜りました。ここに厚く御礼申し上げます。

《会計報告》 収入は、前年度繰越金26万0074円と会費収入などの合計36万8136円。支出は、会報発送費・総会・見学会費など7万6700円で、3月31日現在の決算残高は29万1436円（次期繰越）であった。

【報告】

三池炭鉱施設群見学会

藤木雄二（会員）

6月29日の総会に先立って、当日朝9時から有志を集めて三池炭鉱三川坑の調査を行った。また総会終了後は、石炭産業科学館を見学した後、市内に点在する関連施設を見て回った。マイクロバスによる4時間の見学コースは次の通りで、来年6月世界遺産認定予定の構成資産4か所を含んでいる。石炭産業科学館→三井港倶楽部→三池

港→長崎税関三池税関支署→三池鉄道(黒橋)→万田坑→宮原坑→三池集治監→解脱塔→宮浦坑(石炭化学コンビナートを遠望)→露天堀跡→龍湖瀬坑、という盛沢山な内容となった。

会員の大半は既に施設の多くを見学していると思われるので、ここでは三井港倶楽部にある高島北海(本名高島得三、エミール・ガレに影響を与えた日本画家)作画「大牟田町鳥瞰図」を紹介しよう(写真1)。明治32年に描かれたもので、開削中の万田坑は描かれておらず、大浦坑、七浦坑、勝立

坑、宮浦坑や宮原坑、三池集治監などが描かれている。輸送施設では、九州鉄道や大牟田駅が描かれている。また図の左部分には、七浦坑や大浦坑の石炭を大牟田川河口まで運ぶ馬車鉄道が、鑄物工場・鍛冶工場の南側を通る様子が描かれている。原図では馬の耳まで判別できる。このように大牟田町鳥瞰図は見ていて飽きないが、115年の年月を経て退色が進んでいる。絵画修復技術で当初の鮮明さを復元したいものだが、費用はいかほどだろうか。気になるところである。

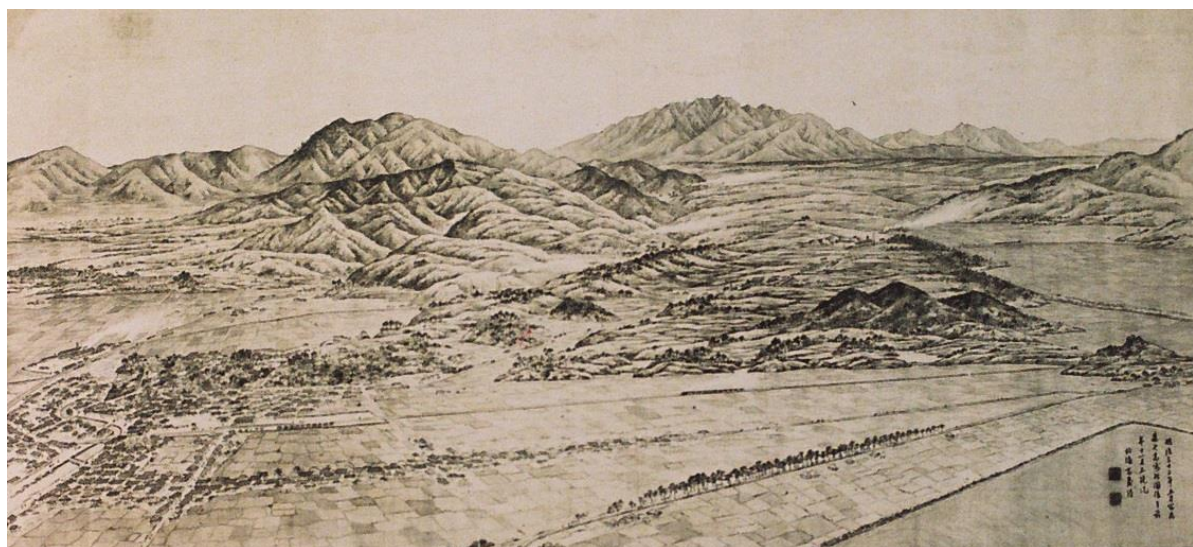


写真1 高島北海「大牟田町鳥瞰図」(三井港倶楽部所蔵)



写真2 馬車鉄道で石炭を運ぶ様子

次に三川坑修復の参考となる「万田坑職場」を紹介しよう。三川坑は昭和15年に開坑した三池炭鉱の主力坑であり、平成9年の閉山時まで稼働していた。物資統制のため、資材のない時代に作られた第二斜坑巻揚機室や線込場は三川坑の雰囲気を出しているが、大牟田市とNPO大牟田・荒尾炭鉱のまちファンクラブで保存方法について意見の違いがあり、その溝を埋める作業を模索中である。NPOは「修復」を主張しているが、市は一部「再建」の方向で、12

月には基本計画を策定する見込みである。市にとっては三池港の付帯施設である長崎税関三池税関支署の修復費用が1億7千万円もかかったことがトラウマになっているようで、修復については非常に慎重である。しかし修復の場合でも、事業費に配慮しつつ、具体的な方法は多様な検討ができるので、早急に結論を出すのではなく、まずは台風と雨対策の養生施設で囲って、じっくり検討すべきだとNPOは主張している。修復の参考になるのが万田坑職場である。

疑問が出されていたので、この場を借りて紹介する(『史跡 三井三池炭鉱跡 万田坑跡職場保存整備工事報告書』平成23年10月、荒尾市教育委員会、より引用)。《第3節 工事対象建造物の概要 職場の建築年代は昭和初期(正確な年代は不詳。大正15年から昭和14年の間の建造と推定される)。……東西外周は腰壁の上に一部を除き2枚引き違い窓を設け、その上に嵌め殺しの欄間ガラス窓があり、さらにその上に内外とも木摺下地漆喰仕上小壁を設けた真壁(しんかべ)構造になっている。》以上引用の通り、万田坑職場は昭和初期の建築であり、外壁の上部は漆喰仕上げであったことがわかる。

見学会終了後は、酒肴を棚から自由に持ち出す方式の懐かしい「和食松本」で懇親会を開いた。一同ビールで喉を潤しながら、当日取材されたNHKニュースが放映されるのを見ながら熱く語り合ったことだった。三川坑保存の経過については、今後も展開を報告していきたい。



写真3 作業現場の指示を行う繰込場



写真4 ランカシャー型ボイラーを転用した圧縮空気貯留タンク

万田坑職場の見学時に現場で、職場西壁の漆喰は当初からあったのだろうかという



写真5 修復前・後の万田坑職場

【報告】

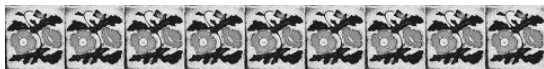
「産業遺産国際会議」報告

市原猛志（事務局）

「産業遺産国際会議」は、内閣官房・「九州・山口の近代化産業遺産群」世界遺産登録推進協議会・（一財）産業遺産国民会議の主催で2014年7月14、15日の両日に東京都内のホテルオークラにて催された。当日催された各セッションでは、産業遺産の保全に関する取り組み、現役の産業設備に関する官民挙げてのパートナーシップ、廃墟への対応など多種にわたる内容について話し合われた。

14日・15日の両日を使い世界各国の研究者からの事例紹介、登録対象の企業や国内研究者による報告等内容は盛りだくさんで、ここでは詳細をつまびらかにすることができないが、今回の世界遺産候補が抱える現状の問題点とその解決策を各国の方々から提案され、また来るICOMOS視察に際して想定される質問をあらかじめ検討できたことが一番の収穫と言えよう。

14日は鹿児島県の伊藤祐一郎知事をはじめ、各県の知事、自治体首長が揃って出席し、午前・午後のセッションのあとのレセプションには安倍総理も出席、「明治日本の産業革命遺産 九州・山口と関連地域」に関して、内閣として全面的にバックアップすることを約束した。



【書籍紹介】

馬場明子著『筑豊 伊加利立坑物語』

木元富夫（顧問）

炭鉱で働いた技術者からの聞き取りをもとに、一つの立坑櫓の半世紀にわたる顛末を描くという、炭鉱史には珍しい著作である。筑豊のシンボルとして田川市の石炭記念公園に残る三井田川鉱業所伊田立坑櫓の建設は明治43年（1910年）で、「この完成は深堅坑開発の金字塔として、筑豊炭田の繁栄を約束するものとなった」（『筑豊の近代化遺産』弦書房）。

本書の主役の立坑櫓はそこから南東約3kmの伊加利に生まれた。「山野〔坑〕三十年安泰」を期して、櫓高52m、立坑深度700mの「東洋一の伊加利堅坑完成、七つもある新日本一」が登場したのは戦後の昭和30年（1955年）のことであるが、この時代に誕生したことで、伊加利立坑の悲運は避けられないものとなった。昭和30年は原子力基本法が成立した年で、政府のエネルギー政策が石炭から石油に、更に原子力にとシフトしつつあった時期である。たとえ技術的困難を克服しても、このようなエネルギー事情を背景には、日本一の立坑も活躍の見せ場がない。田川鉱業所は昭和39年に閉山し、伊加利立坑櫓は三池港沖に移設され、ここで30年以上稼働するが、その三池も閉山した後の櫓の余生は本書を御覧頂きたい。著者は元テレビ西日本ディレクターで、そういうこともあってかカットバック的あるいは省略的な叙述が見られ、読みづらい部分が無いでも無いが、類のない読み物であり、一読を奨めたい。

（未知谷、2013年11月刊、本体1600円。）

◇◇会報原稿募集（会員外でも応募できます！）◇◇

『九州産業考古学会報』への積極的な投稿をお願いします。募集原稿は【報告】（700字～1400字程度）や【研究発表】（1400～2800字程度）、【お知らせ】（400字以内）など。いずれも図表を入れる場合文字数要調整。また紙面の都合上、文面レイアウトに関して編集側で変更する場合があります。投稿に関する詳しい情報は学会ウェブサイト及び事務局まで。

■■会報第21号・目次■■

【巻頭言】

産業考古学の魅力 ……尾崎徹也 1

【書籍紹介】

馬場明子著『筑豊 伊加利立坑物語』
……………木元富夫 5

【報告】

平成26年度総会 ……砂場一明 2

三池炭鉱施設群見学会 ……藤木雄二 2

「産業遺産国際会議」報告
……………市原猛志 5

【お知らせ】

今後の予定 …… 6

会費納入・ご寄付のお願い …… 6

今後の予定		会費納入・ご寄付のお願い
11月 8・9日	赤煉瓦ネットワーク全国大会（群馬県富岡市）	当会は年会費を個人会員2000円、団体会員は5000円それぞれ徴収しています。当会の趣旨をご理解頂き、会費納入或いはご寄付の程、どうぞ宜しくお願い申し上げます。 会費納入・寄付先口座（一覧） ・ゆうちょ銀行 17430-88882241 キュウシュウサンギヨウコウコガツカイ ・福岡銀行大牟田支店（店番691） 普通 1914369 九州産業考古学会
11月 14～ 16日	産業考古学会全国大会（岡山市）、シンポジウム、見学会	
12月 ・1月	内閣府世界遺産現地報告会（予定）	
2月	会報22号発行	
3月	明日の建築と都市展（福岡市役所1階ロビー）	

<編集後記>

世界遺産候補「明治日本の産業革命遺産—九州・山口と関連地域—」に対するICOMOSによる現地視察も無事終了し、本登録に向けた動きも本格的になってきた。構成遺産を抱える自治体が東北や東海など広範囲に及ぶため、それぞれの地域で盛り上がり濃淡があるものの、ここは産業遺産への関心を促す好機として積極的に考え、今後の動きにも注視していきたい。（市原）

九州産業考古学会事務局 〒811-3430 福岡県宗像市平井二丁目12-1 砂場一明 気付
TEL&FAX: 0940-36-5501 E-mail: k-sunaba@jcom.home.ne.jp URL: http://kias.kilo.jp/index.php
学会ML希望者は、上記アドレスもしくはWeb担当者(iota_titanus@yahoo.co.jp)まで連絡願います。